

2014年9月28日川越教会

## 故郷を目指して

加藤 享

### 〔聖書〕創世記 49章 29～33節

ヤコブは息子たちに命じた。「間もなくわたしは、先祖の列に加えられる。わたしをヘト人エフロンの畑にある洞穴に、先祖たちと共に葬ってほしい。それはカナン地方のマムレの前のマクペラの畑にある洞穴で、アブラハムがヘト人エフロンから買い取り、墓地として所有するようになった。そこにアブラハムと妻サラが葬られている。そこに、イサクと妻リベカも葬られている。そこに、わたしもレアを葬った。あの畑とあそこにある洞穴は、ヘトの人たちから買い取ったものだ。」ヤコブは、息子たちに命じ終えると、寝床の上に足をそろえ、息を引き取り、先祖の列に加えられた。

### 〔序〕神の約束を信じ抜いて

7月から3ヶ月にわたって、創世記からイスラエル民族の**始祖アブラハム、イサク、ヤコブの信仰**を学んできました。今日は最終回です。時代的には紀元前2000年から1700年頃、今から約4000年程も昔のことです。アブラハムは文明の発祥地の一つ**メソポタミア地方**から、神の語りかけに聞き従って、辺鄙な**カナン地方**に移住しました。そして**神の約束を信じ抜いて**、カナンに留まり、**寄留者としての生涯**を送りました。二代目イサクは平和の子として誰をも傷めずに、父の敷いたレールを静かに歩み通しました。それに比べて三代目ヤコブは実に波乱万丈の生涯を送りました。

ヤコブは双子の兄エサウが受けるべき族長の祝福を、老いた父をだまして横取りし、兄の怒りを逃れて、祖父アブラハムの出身地ハランの母の実家で20年過ごします。しかし才知を働かせて財産を増やし始め、伯父や従兄たちに妬まれて、カナンに戻って来ます。兄エサウの復讐を恐れて脅えましたが、神の助けによって何とか和解することが出来ました。ここまでが前回の学びでした。

しかし今日は**ヤコブの臨終**の場面です。彼はエジプトで死にました。どうしてエジプトで死んだのか、ヤコブの生涯はまだまだ波乱続きだったのです。そこでカナンに帰ってきてからの**後半生**を、先ず簡単に見ておきましょう。

### 〔1〕ヤコブの後半生

兄エサウと和解できた後で、ヤコブはアブラハムが最初に祭壇を築いて礼拝した**シケム**に留まろうとしましたが、**息子たち**がとんでもない事件を起こして

しまいます。シケムの首長の息子が彼らの妹と是非結婚したいと願うので、それを嫌ったヤコブの息子たちがその一族を**騙し打ち**して皆殺しにし、町を略奪したのです。周辺の先住民の怒りをかい、復讐されるに違いありません。ヤコブは**ベテル**に逃れました。20年前に唯一人でハランに向けて旅に出た時、石を枕に野宿した夜に、神から「**必ずここに連れ帰る。決して見捨てない**」との約束をいただいた地です。神は戻って来たヤコブに20年前と変わらずに、再び祝福の約束をして下さいました。

ヤコブは老いてきました。しかし10人の息子たちにまさって最愛の妻ラケルが産んだ11番目の息子**ヨセフ**を特別に可愛がったので、ヨセフは兄たちに妬まれ、奴隷商人に売り飛ばされてしまいます。40章からは劇的な**ヨセフ物語**です。エジプト王の侍従長の家の奴隷となったヨセフが、神の不思議な導きでエジプト王に次ぐ地位に出世しました。大飢饉が世界を襲い、ヤコブの兄たちも食糧を求めてエジプトに出向きました。兄たちと再会したヨセフは、ヤコブに**エジプト移住**を説得して一族を皆迎えます。こうしてヤコブは人生の**最晩年の17年間**を、やっと平安に送ることができました。

**死ぬ日が近づいた時**、ヤコブはヨセフを呼び寄せて言いました。「どうかわたしをこのエジプトに葬らないでくれ。わたしが**先祖たちと共に眠りについたなら**、わたしをエジプトから運び出して、先祖の墓に葬ってほしい」（47：30）ヨセフは「おっしゃるとおりにします」と確約しました。

それからヤコブは先ずヨセフの二人の子どもを祝福し、続いて彼の息子たち12人に父親としての教訓の言葉を与えた上で、命じました。それが今日の聖書の箇所です。「間もなくわたしは**先祖の列に加えられる**。わたしをヘト人エフロンの畑にある洞穴に先祖たちと共に葬ってほしい。」「そこにアブラハムと妻サラが葬られている。そこにイサクと妻リベカも葬られている。そこに、わたしもレアを葬った。」ヤコブは、息子たちに命じ終えると、寝床の上に足をそろえ、息を引き取り、**先祖の列に加えられた**のでした。

## 【2】先祖たちと共に

ここで気付くことは、アブラハム、イサク、ヤコブが**三人三様の人生**を送りながら、その死については**全く同じ言葉**で記述されている点です。アブラハムの場合——「満ち足りて死に、**先祖の列に加えられた**。」「息子イサクとイシュマエルは、マクベラの洞穴に彼を葬った」（25：8～9）イサクの場合——「満ち足りて死に、**先祖の列に加えられた**」「息子のエサウとヤコブが彼を葬った」

(36 : 29) ヤコブの場合——「寝床の上に足をそろえ、息を引き取り、**先祖の列に加えられた**」(49 : 33)「ヤコブの息子たちは父のなきがらをカナン土地に運び、マクベラの畑の洞穴に葬った」(50 : 13)

「**先祖の列に加えられた**」この原語を直訳すると「**彼の民に集められた**」です。神は甥のロトと離別したアブラハムに「あなた自身は長寿を全うして葬られ、安らかに**先祖のもとに行く**」(15 : 15)と約束しておられます。またヤコブはヨセフに「わたしが**先祖たちと共に眠りについたなら**」(47 : 30)と言っています。地上の生涯を閉じるとは、「**先に眠りについた先祖たちのもとに行き、共に眠りにつく**」という信仰ですね。

ですから口語訳の「**その民に加えられた**」でもよかったのに、どうして新共同訳だけは「先祖の**列**に加えられた」と訳し直したのでしょうか。聖書教育は「死後のイメージが天国へ行ける・行けないというような場所にあるのではなくて、**主との生きたつながりが死後もなお続くことをこそ願ひ、先に召された信仰者の信仰のつながり中に加えられていくことの大切さを表わそうとしたのだらう**」と解説しています。

アブラハムは**行き先も知らずに**出て行きました。そしてカナンに来ると「あなたの子孫にこの地を与える」と神から言われました。**目的地に着いた**のです。しかし彼は家を建てて定住せず、生涯**寄留者**として**幕屋住まい**を通しました。イサク、ヤコブも同様です。**その心**を新約聖書は「神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ**都を待望**していたから」(ヘブライ 11:10)「更にまさった故郷、即ち**天の故郷を熱望**していたから」(11:16)と解説しています。

彼らにとっては、**地上の生涯が全てではなかった**のです。神さまのお傍で共に暮らせる天の故郷、はるかに良い神の都を待望しつつ、**天を目指して地上の生涯を終え、眠りについた**のでした。墓とは信仰者にとっては、天の故郷に迎えられる朝を待ち望みつつ眠りについている**寝所**なのですね。

### 【3】墓の役割り

最近誰も墓参りに来ないので撤去される墓が増えてきたと報道されています。これまでは、家族の遺骨を納めて代々にわたって墓を守り続けていくことが、その家で生まれ育った者の**大事な務め**でした。しかし人口が都市に集中し地方が過疎化して来るにつれ、田舎の墓を守る人が居なくなっています。「古里は遠くにおいて想うもの」懐かしいのですが、年とともに疎遠になっていきます。

遠くまでお墓参りに行くのは大変だ。そもそもお墓は必要なのか？自分や妻が亡くなった後、今 13 才の独り娘に負担をかけたくないと、家の墓を撤去した 63 才の男性が TV に出ていました。「墓を心の拠りどころとするという感覚がなくなった」という声も聞かれました。

墓の役割りは、死者の霊を慰めるためです。死者の霊は初めは不安定で家の周りをさまよい、時には災いをもたらします。それが 49 日、100 日、一週忌と供養を営むうちに死霊も和やかになり、家の繁栄をもたらしてくれる霊になります。そして家の法要を 30 年受けると血縁を離れて地域全体の繁栄に貢献する霊、氏神の仲間入りするので、村全体でお祭りをする、これが多くの**日本人の考え方**なのだそうです。

また家族が毎日死者に供え物をして手を合わせることによって、先祖と**魂の会話**を続けることで、家族が**お互いを大切に**する心が養われていく——その意味からも位牌や墓は大切だと言われています。しかしこのような考え方には、死者本人が、現在どのような状態にあるかについては、明確な信仰がみられません。

これに対して今日の聖書は、アブラハムもイサクもヤコブも、**天を目指して生きた地上の生涯**を終えて、神さまのお傍で日々共に暮らせる天の故郷、はるかに良い神の都を待望しつつ、**先に眠りについた人たちと一緒に**、天の故郷に迎えられる朝を待ち望みつつ**眠りに**ついてい**る**のだ、という信仰を教えてください。

### **【結】眠りについて教会家族を覚えつつ**

私たちは先週の日曜日に、去年の 9 月 22 日に続く**第二回永眠者追悼記念礼拝**を守りました。川越教会という**教会家族の一員**として一緒に礼拝を守られた方の中で 10 人の方を偲ぶ資料しか作成できませんでしたが、この方々が天の故郷を熱望しつつ、アブラハム、イサク、ヤコブたちと**共に眠りに**ついて居られることを嬉しく思います。

私は 10 人のうち、田中さん、菊地さん、磯部さん、鈴木さんの 4 人しか存じ上げていません。先週、磯部優さんが父上の思い出を語り、礼拝の会衆賛美の録音から磯部兄弟の賛美「人生の海の嵐に」を聞かせて下さいましたね。私は磯部兄弟が今ここで一緒に礼拝している思いになりました。嬉しかったです。

**信仰をもって地上の生涯を終えられた方は、アブラハムたちと共に、眠りについて居られるのです。私たちはこれからも、教会の墓碑に名前を刻み、その兄弟姉妹を覚えつつ、共に礼拝を守り続けて参りましょう。**

死をもって地上の生涯を終えられた方々は、**無**に帰して**消滅**してしまわれたのではありません。**主なる神を信じ、神に従って生きた方は、**同じ信仰に生き続ける信仰者と共に**眠りについて**、天の故郷・神の都に迎えられる朝を待つて居られるのです。

私たちは、川越教会の教会家族として共に礼拝を守ったその方々をこれからも覚えつつ、今ここで信仰生活を続けて参りましょう。天の故郷を心から待望し、一日一日を感謝して生きて参りましょう。そしてその日が来ましたら、**先に召された信仰者の列に**喜んで加えられて行きましょう。

お祈りします

神さま、ここは約束の地だよと示されながら、アブラハムもイサクもヤコブも、定住する自分の家を建てませんでした。あなたが設計し、あなたが建築して下さる神の都、天国こそ、永遠の住まいだとの信仰をはっきり持ち続けて、この地上の生涯を寄留者として送りました。私たちもその信仰を学びたいと思います。色々なものに執着しても、この地上の生涯を終える時には、みな置いて行かなければなりません。でも信仰はいつまでも持ち続けて、天の故郷、神の都に迎えられる日を待つ者で在り続けることが出来るのです。どうぞ私たちにもその信仰をしっかりと持たせてください。私たちの教会家族の一員として、一緒に礼拝を守られた方を一人一人祈りに覚えながら、私たちはここで礼拝を続けて参ります。私たちの祈りをお聞き入れください。救い主イエスさまの御名によって、お捧します。      アーメン